



小林家に音楽がなくなつて半年たつ。
お父さんのコレクションのエイティーズ洋楽CDが流れることも、お母さんがヒットソングメドレーの鼻歌を歌うこともない。もちろん、この春、中学に入学して、あこがれの軽音楽部に入ったばかりの里乃(りの)も、家では音楽を聞かない。

土曜日の朝、里乃があくびしながらダイニングの扉を開けると、新聞を読んでいたお父さんが顔を上げた。お父さんは平日の朝は早いし、夜は里乃が塾で遅い。ちゃんと顔を見るのは久しぶりな気がする。なんとなく気まずくて、里乃は、テーブルに背を向け、冷蔵庫に向かった。テレビもついていない静まりかえったダイニングで、里乃のスリッパのばたばた歩く音がする。

「里乃、軽音楽部に入ったんだって?」

お父さんの声に、里乃は冷蔵庫に伸ばした手を止めた。背中にお父さんの視線を感じる。話してみようか? でもどうやって?

「里乃、お父さんに返事は?」

「うっさいなあ」

お母さんに言われて、反射的に悪態ついてしまった。

「里乃。ちゃんとホワイトボード使って答えなさい!」

「今、そうしようと思つてたのに!」

里乃は、冷蔵庫に貼り付けてあるホワイトボードの、ペ